

子どもの父親像形成において父親の家事貢献がもたらす影響

○井戸陽子 草野篤子(信州大学教育学部)

目的 父親が家庭の仕事に関わる度合いが子どもの目にどのように映り、どう評価され位置付けられているかを知る。また同様に母親による父親(夫)への評価と、父親の自分自身への評価の両方によって父親を評価する。これを子どもの評価と比較することによって、父親に対する捉え方について家族員 3 者の意識の一致やズレを検証する。

方法 1999年7月初旬、岐阜県高山市の公立小学校5・6年生104名およびその父親103名、母親101名、合計308名に質問紙法による調査を行い、クロス集計、数量化3類等によって分析を行った。

結果 父親は家庭の仕事に関わる度合いで、家族に協力しているか否かを評価される。協働型父親は子どもや母親と接触時間を多く持ち、子どもの教育にも妻と共に携わっているものが多い。協働型父親を持つ子どもは、自らも手伝いを好み、性別役割分業観を持つものが少なく、父親との信頼関係を築いていると感じ父親を好きと答えている。非協働型父親をもつ子どもは父親は頼れる存在でないと感じ父親を嫌う。判別不可能型父親の子どもは、父親の子どもに対する態度を判断しかね、父親をまあまあ好きと答える。協働型父親は性別役割分業観を持つものが少ない。また、子どもとの関わりに積極的であった。しかし、協働型父親であっても子どもからの信頼や尊敬を実感できていない父親が多い。母親も子どもの結果と同様な評価をしている。協働型父親の家族では3者ともに子どもと父親の関係が良好であるとし、非協働型父親では意識のズレが見られた。